

資質を伸ばす教育

構造家・松本年史

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■坪井研究室を経て

構造家の松本年史さんは、北九州の小倉高校出身。「歴史のある偏差値の高い高校で、野球でも有名な学校ですね」と覇志堂。父上の転勤にあわせて北九州、堺、君津と移り住んだ。新日鉄で工場を設計していたエンジニアである父親の進言で、卒業後の進路は建築構造のエリート校である日本大学へと進むことにした。元々デザインが好きでプロダクトにも魅力を感じていたが、これも父上のアドバイスで建築を選んだのだった。本コラムに登場した構造家は、父親の影響で進路を決めている方が多いようです。男性が多い建築界だからなのか？

大学2年のときには建築設計事務所にアルバイトに行き、建築の厳しさを実感した。大学の設計演習課題は設計テーマを決めて取り組んだが、3年の劇場の演習課題で「吊り構造をやろう」と決め、その道のエキスパートである齋藤公男先生の研究室へ質問に通った。3年の春休みに研究室の先輩から声がかかり実験の手伝いをするようになる。素直で勤勉な大学生の松本さんが思い浮かぶ。卒論は当時まだ発展中だったマトリックス法のプログラムづくりだった。大学院で齋藤先生のところで形の研究をしたかったが、日大ではこのテーマは難しいといわれ、齋藤公男先生に東京藝術大学の坪井善昭研究室を紹介してもらい修士を取る。それにしても、現在中枢で活躍する構造家で齋藤先生のお世話になった方はかなりの数になりそうです。

木村俊彦先生に「お見合い」といわれて面接を受け、本採用になったのが半年後。自由な雰囲気だった坪井研究室とは打って変わり、静かに黙々と仕事をする木村俊彦構造設計事務所で12年間勤めあげた。大型作品ばかりでなく、建築家の篠原一男が設計する住宅など、得難いさまざまな建築を担当したの

も木村事務所時代だった。

■ 国立女子大学で

松本さんの教育者としての実績は、山形の東北芸術工科大学を経て、国立女子大学建築・デザイン学科の教授になり8年になる。実は大学非常勤講師としての最初が国立女子大学であり、国立女子大学とは20年以上の長い縁がある。家政学部なので、授業では建築構造をハードに教えるのではなく、学生には構造的センスを身に付けてもらうため、構造模型による力学の実験も取り入れている。家政学部の学生の「生活者として必要な資質を伸ばす」ために、建築やデザインの基本を教育する姿勢を重視している。「構造設計はコンピュータの発展とともに変化し、CADの可能性も拡大している中で、建築・デザイン学科での教育も変化が求められる」。

■ NPOゲル

松本研究室へ入ると、棚に並ぶゲルの模型が印象的だ。聞けば「NPO法人ゲル」を主催しているのだ。定期的に建築家の中村勉さんや木製サッシをつくる木原正進さんたちと研究会を行っている。モンゴルに1、2週間滞在してモンゴル科学技術大学と共同研究を行っている。目的はセルフビルドの住宅づくり。立ち枯れの木を使って独自にCLTに似た木質パネルを住宅に用いる研究をしている。その材料を使って、住む人が自分で建築をするシステムづくりである。その断熱には未活用の羊毛などを使う計画である。一軒が70～90m²あり、屋根にはロシア製のアスファルトを使う計画もあって国を跨いで素材を選んでいる。モンゴル遊民族の移動式住居ゲルは自らが組立を行い、人々はセルフビルドに慣れているはずだから、実現する日も近いプロジェクトだ。

興味のある方は門をたたいてください。

